

学校経営のポイント

萎縮させずに、“希望を失わせない教育”を

若井 彌一

多くの学校では、児童・生徒の「夏休み」に入っている。しかし、学校教員にとっては、「夏休み」という実感は持ち得ない毎日が続いているかもしれない。

暦（太陽暦）の上では、立秋（8月8日頃）を迎えたが、暑中のご精励に敬意を表するとともに、ご自愛をと願う次第である。

試練を直視し、超える希望を促す

「東日本大震災」は、震災被害がきわめて広範囲であったことが特徴のひとつである。しかし、そうは言っても、日本国民のすべてが、直接、震災（津波を含む）の被害を受けたわけではない。直接的な被害を受けていない場合、子どもであろうと大人（成人）であろうと、被害を受けた人々と同じ心境になることには、ある程度の困難が伴うことは想像がつく。しかし、直接被害を受けていなくても、被災者の苦しみや悲しみ、無念な心境に思いをめぐらせてみる取り組みはできる。

教育的取り組みとして重要なことは、この可能性をどの程度まで達成できるかを意識して、学校教育で（家庭教育や社会教育とも連携して）、実践を試みることであろう。

「わが地域や学校では、幸いにも、まったく被害が生じていない。心静かに勉強やスポーツに励みましょ」と児童・生徒に訴えかけるだけでは、やはり不十分である。

必要な取り組みの1つは、こんなに多くの人たちが亡くなったり、行方不明であったり、あるいは、家を失って住めなくなったり、土地を離れなくてはならなくなったり、働くところ（職場）を失ってしま

ったり、農業や漁業を維持することができなくなったりと、被害の範囲と程度が深刻であることを、概略であっても理解して、「今、自分たちには、何ができるであろうか？」との意識を、児童・生徒が持つことができるように導くことである。

もう1つの取り組みは、このように大きな被害状況に直面しても、けっして希望を見失って、地道な努力をすることの大切さを忘れてしまったり、努力することを放棄してしまうことにならないように、精神的安定を促し、安心して学習活動、スポーツ等に励むことができるように配慮することである。

歴史に学び、歴史を超える意欲を促す

自然災害だけでなく、伝染（感染）性の強い、致死率の高い病気により多くの人々が生命を失い、おびえてきた歴史的悲劇を重ねて、われわれ（人類）は、今日（現在）がある。自然災害・病気だけでなく、人災の極みとも評すべき「戦争」によっても、じつに夥しい数の人々の生命が奪われてきた。

これが、人類の歴史である。しかし、原因は多様であるが、その原因を静かにふり返り、また、われわれ（人類）は「可能性への模索」を繰り返してもきた。

このことを、各学校では実例を示しながら、子どもたちに語りかけ、ときには考えさせ、意欲や決意を促す継続的な取り組みを試みてほしい。継続性のある取り組みこそ「教育の力」の特徴であり、強みであることを自覚して、今後の指導に工夫をもって臨みたい。

（わかい・やいち=上越教育大学長）

本紙は<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●最新刊好評発売中！ モデル応答例、実績アピールのコツなど合格に必要な要点を提示！

『改訂 学校管理職選考直前チェック 面接合格の勘所』

大宮 光徳(元東京都教育庁主席管理主事)【編】

四六判 128 頁 / 定価 1890 円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料 FAX 0120-462-488 をご利用ください(24 時間受付・即日発送)